

# いそくじ 以速寺通信

2012/11 第121号

真宗大谷派三鏡山以速寺 発行  
〒593-8312 堺市西区草部 79

TEL 072-275-0339

FAX 072-272-3020

また新しい冬がやってきました



この身に受けている  
いのちは  
限りない  
つながりと  
限りない  
関わりのおかげに  
賜わっている

宮城  
顛

11月25日大逮夜をお勤めします (裏面参照)

## 第三回夏弘教講座(抄)その二 「浄土を願って生きる」2012/8/3

つなかりの回復

大谷大学教授 一栗 真師

京都の宇治に十田玉の凶案になって  
おります平等院鳳凰堂があります。

あれは親鸞聖人を遡ること200年  
ほど前、今から約千年前に建てられま  
した。

当時、藤原頼道(よのみち)と云い、  
藤原時代でも栄華栄耀のピークを極め  
た人が「生きてる時は良かったけれど  
も、死んだあと地獄に落ちちゃかなわ  
ん。死んだ後も楽かできるよ」とい  
極楽に生まれることを願って建立した  
のです。

今はそれこそ、だれでも拝観料を払  
えば入って中まで拝むことができますが、  
昔は川の対岸から、遠くから、御本尊  
のお顔を拝ましてもうただけだったそ  
うです。要するにあの建物は、藤原頼  
道一人が浄土に連れて行ってもらうた  
めの装置だったのですね。装置とい  
う言葉が悪いかもしれませんが、だれ  
も入れなかったわけでは。

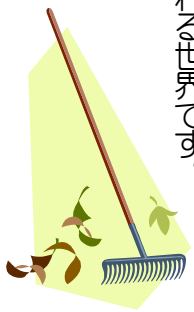
そして、頼道は最期、御本尊と自分

の手を五色の糸で結んで「これで極楽  
往生は間違いない」と命を終えていか  
れたそうです。

でもこれ、一百年後に出られた親鸞  
聖人は、いろいろ明らかなことを感じ  
られたのではないかと思います。

まず自分一人だけが行くよつな世界  
は、阿弥陀の浄土ではありません。

阿弥陀の浄土はどんなものも平等に  
迎えられる世界です。



ああいう装置を作って五色の糸を結  
んでですね、条件を整えた人だけが行  
くよつな世界ではありません。

ですから、「えらい狭い世界を、願っ  
ていたんだなあ」といふことを、親鸞  
聖人は「賢くなったに違いないんです。

ましてや、五色の糸で、これで必ず  
行けるであろうといふのは、期待とし  
てはあるかもしれませんが、実際はど  
う行かれたでしょうね。

これは分からないです。親鸞聖人が  
らすると、そいつ死んだ後どう行く

か分からないよつな浄土。これを本当  
の浄土とはおっしゃらないのです。

これが今日お話ししたい中味でもあり  
ます。今の私たちの生き方に深く関わ  
る、そういう仏様のお働き、教えとし  
ての浄土。これが親鸞聖人が非常に大  
事になされたお浄土なんです。

ただ、もう一度いいますが、千年前  
の藤原頼道が願ったよつな、阿弥陀の  
世界、極楽世界と言つのは、今でも決  
して消えて無くなったわけではありま  
せん。

お浄土とか極楽と言つと死んだ後に  
別世界としてどこかにあるよつに考え  
ておられる方が多いです、そつとつと  
ころこつとやたら行けるんですかと  
いふ質問、これもよく受けるわけです。

しかし、念仏一つでどんなものも平  
等に迎えられる世界。これが阿弥陀  
の世界であります。「あなたは来るな  
」とか、「お前は入れてやらない」とい  
ふことを決しておっしゃらない。「これ  
が阿弥陀さんの世界です。それが今の私  
たちの人生とどう関わるのか、こんな  
ことを今日は考えてみたいですね。

文責住職

—法悦の口々—



「坊様、わしのような修行もしたらんものも、法然上人がおっしゃるように、本當に救われて行くのか？」

「う吉水の草庵で、もう随分長く親鸞聖人と老婆との対話が続いている。

「婆様は、善悪を自分の力だけで行っておると思っておるじゃ。それが間違え。わしらの行いはそんなに薄っぺらなはず。」

「薄っぺらでない？ わしには、物事をめつくり考えぬやうな頭も余裕もないぞ。悲しいかな行き当たりばつりの人生じゃ……。」

「はい、婆様はなぜ飯を食つ。飯を食つては、畢竟、他のいのちを奪つておるじゃ。」

「腹が減るからじゃ。理屈はいひん。」  
「はい。まったくそのとおおじゃ。食えねば、やがて死ぬ。」

「じゃ。わしはまだ死にたくない。いや、こんな世の中じゃ、死んでもか

まわんと思つた」とは何處でもあつた。しかし、理屈を超えてやがて腹が減る。無性に飯が食べたくなつた。

「婆様それじゃ。婆様の思い超えて、『このちが生きたい』と叫んでおるんじゃ。わしらの頭で考えたちっぽけなことでわしらの行いが決まつておるわけでない。」

「しかし飯を食つのはわしじゃぞ。」

「婆様、婆様には子がおるか。」

「藪から棒になんじゃ。孫もいるぞ。」

「婆様には父母がおつたか？」

「あたりまえじゃ。わしや塵から湧いて出たのではないぞ。」

「婆様、いのちは繋がつておるんじや。ずつと昔から、わしらが想像せできん昔から。そして、これからもずつと繋がるいのちをわしらは生きておるんじや。わしらの思いを超えてな。」

「坊様、そんなもんかな。しかし、だからといって、飯を食つために殺生を続けては、澱(おろ)りのやうに、悪事がたまるのではないか。」

「安心せい、だからこそ修行べしいでどうもならんわしらを救つてくださるのが南無阿彌陀仏じゃ。」

—お内仏のお掃除—

まず、お内仏のゴミやほりり、良質の毛ほつきで軽く払います。

そして、漆塗り、または唐木のところは柔らかい布でぬぐっておきます。

落ちにくい汚れや手垢は、必要に応じて仏具店で購入できる専用のワックアなどを使用します。

また、金箔の部分は、じつじつと毛ほつきではたぐ程度にし、他の金属部分も塩分を嫌つので、なるべく手で触らずに布を当てるやうに掃除します。

そして、燭台のよつた真鍮製品は、専用の薬品を使って磨き上げていただきます。(金メッキのお磨きは厳禁です)

なお、薬品については仏具店で購入できますが、お寺では、水溶液につけるタイプの「ニナ

ガール」と、磨き上げる「ピカール」等を併用しています。

磨き上げる薬品は、少量つけるのがコツです。



おおたいや  
**大速夜の御案内**

どなた様も  
ご参拝お待ち  
しています。



**浄土真宗の宗祖**

親鸞聖人のご命日は十一月の二十八日です。

その前日のお勤めを大速夜(おおたいや)と申します。

今年も、多くの方とご一緒に、この大速夜をお勤めしたいと思  
い、近い日曜日にお勤めすることとなりました。また、お斎(おと  
き・法事の食事)として、「大根炊き」も用意いたします。

皆様こぞって御参詣ください。

記

● 11月25日 (日曜日)

午前11時から お勤め

引き続いて お斎(とき) **大根炊き** (一杯100円)



☆大根炊きについて☆

その昔、親鸞聖人が全国を巡られたとき、お米などでもてなすことが困難であつたので、大根を煮てお出ししたところ大そう喜ばれた、という故事にちなんだものです。

編集後記

今年も、非常に多くの方とご一緒に報恩講をお迎えすることができました。まずは役員の方々をはじめ御尽力賜りました皆様に心よりお礼申し上げます。

さて、ご存じのとおり、報恩講は毎年行う親鸞聖人のご法事で、真宗門徒の何より大切な年中行事といわれます。

このため、一年間でこの時にだけ使う仏具も数多くあります。まず目に入るのは、正面に御花が二つと鶴亀の蝋燭立てが二つになることでしょう。

月参りなどでお参りしますと、お仏壇にお花が二つ飾ってあるところがありますが、通常はお花一つに蝋燭一つが正式なお飾りとなります。なお、花瓶(かひん)・香炉・燭台で三具足(みつぐそく)と呼ばれます。具が足りるとは完成を意味しますから、それ以上たす必要がないのです。ちなみにお花を二つ、蝋燭を二つにすることを五具足と言ひ、通常は五十回忌のような法要にのみ用います。また、打敷をいつも掛けてあるご家庭もありますが、こちらは行事の時だけ掛けます。日頃は掛けません。お花と蝋燭が二つで打敷があつた方が丁寧な感じがしますが、平素はあえてしないのです。

これは特別な日を頭だけではなく、目で体で、感じるように工夫されているのではないのでしょうか。綺麗だからといって、毎日を盆と正月にするわけにはいかないのです。

さて、このように特別な日としてお飾りされた今年の報恩講。私にとって本当に特別な日であつたか、単なる行事に終わっていないかを、沖野先生の法話を思い出しつつ反省し、大速夜に臨みたいと思います。

住職 山雄 竜磨